

重要文化財 大和文華館所蔵「蜀葵遊猫図」・「萱草遊狗図」

現状模写及び復元模写

博士前期課程 日本画領域 手塚 華

《原本について》

「蜀葵遊猫図」 伝毛益 絹本着色 25.3×25.8cm 中国・南宋（12世紀） 大和文華館蔵

「萱草遊狗図」 伝毛益 絹本着色 25.3×25.7cm 中国・南宋（12世紀） 大和文華館蔵

両図はともに、前景に五匹の猫犬の親子、後景には奇石と植物が描かれている。「萱草遊狗図」の子犬に付けられた赤いボンが宮廷の飼犬であることを示しており、宮廷庭園で過ごす愛玩用の猫犬の様子を描いたものと推測される。また、猫は耄（七十歳）、蝶は臺（八十歳）の音通であることから長生の意味があり、萱草は男子誕生を祈る画題であるため、両図ともに全体として吉祥の意味を持つ。画面上の愛らしい動物たちに施された精妙な毛描や、植物の繊細な描き込み、それに対して奇石の大胆な表現が印象的であり、特に精妙な毛描きにおいては、最も質の高い描写を持つといわれている。

伝称作家の毛益は、南宋孝宗朝の乾道年間（1165－73年）に画院待詔となり、花鳥や小画面の絵画を得意とした画家として伝えられていることから、毛益の伝承を持つ絵画は多く見られるが、現在のところ、本図も含め毛益の作品だと断定できるものは見つかっていない。南宋以降、動物画の画題として、猫犬の親と寄り添い眠ったりじゃれたりする子猫犬が、中国や韓国、日本でも多く描かれていることから、本図は、動物群像の古典としての価値が非常に高いことが指摘されている。

本研究では、質の高い絵画の模写により技術を磨いた日本の絵師たちに倣い、南宋時代院体花鳥画の模写を行うことで表現技術の向上を目指す。また、現状の欠損や褪色箇所を復元し、現状絵画に対し復元絵画から受ける印象の変化について考え、鑑賞画としての絵画性について理解を深めたい。

《模写の工程》

[現状模写]

- 1.下図 美濃紙に滲み止めとしてドーサを引いたものを、原寸大写真の上に置き、抑揚を意識して墨線を写し取る。
- 2.基底材の準備 原本に可能な限り近い絹を使用し、染色し古色付けを行う。砧打ちし、木枠に張り込みドーサを引いた後、更に画面を平滑にするために石擦りを行う。
- 3.線描・彩色 熟覧資料を基に、原本の繊細な描写や明快な彩色の印象を念頭に置き、模写を進める。
- 4.装潢 熟覧の資料を基に、基底材の絹色に合うよう染色した美濃紙で肌裏を打つ。古裂や古色に染めた裂を使用し現状の原本同様、掛軸装に仕立てる。



[復元模写]

- 1.復元案 制作された当初の姿を推測し、欠損箇所を復元する。同時期の作例などを参考にして復元案を作る。
- 2.基底材の準備 当時は絹に漂白処理が行われていなかったことを考慮し、現状模写と同じ絹を生成り色に染色する。染色後は現状模写同様、砧打ち、ドーサ引き、石擦りを施す。
- 3.線描・彩色 現状模写や参考資料を基に、線の抑揚、絵具の厚みに注意しながら、しっかりと描写する。
- 4.装潢 基底材の絹色に合うよう美濃紙を染め、肌裏を打つ。当初は画冊であった可能性が高いため、本研究作品も画冊仕立てとする。



《まとめ》

原寸大写真などでは確認し難い精緻な描写を熟覧時に確認することができたことは大変貴重な経験であった。猫犬には流れるような毛描き、植物は鮮やかで精妙な描写、奇石は粗筆で大胆に描かれ、物質の持つ質感や存在感が確かな技術で巧みに描き分けられているのを感じ、ものを観察することがいかに説得力ある描写に繋がるのかを実感した。復元絵画は、現状では薄れてしまった明るく華やかな色調を取り戻し、動物たちの可愛らしい印象が増したことで、男児誕生や長寿を祈る原本の鑑賞画としての意図が伝わり易くなった。また、復元絵画を画冊として仕立てたことによって、図像に施された描写をじっくり観ることができると気が付いた。南宋時代に小画面に繊細な描写を施した絵画が好まれ、画冊として流布した背景として、精緻な描写をじっくりと鑑賞できる画冊のような形式をとっていることも、重要な役割を果たしているのではないかと感じた。